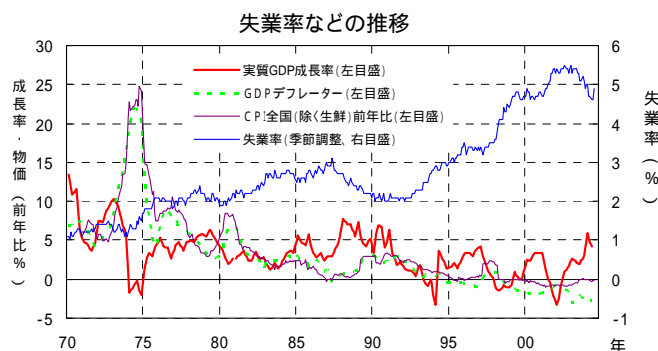


1. 参考文献と採点結果

- ・前期試験の採点結果については、下記のホームページの「講義資料ほか」 3. 日本経済論のレジュメ「前期末試験の結果概要」を参照
- ・「マクロ経済学・入門」第2版、福田慎一・照山博司、有斐閣アルマ、2001年
- ・「仕事の中の曖昧な不安 揺れる若年の現在」玄田有史、中央公論新社、2001年

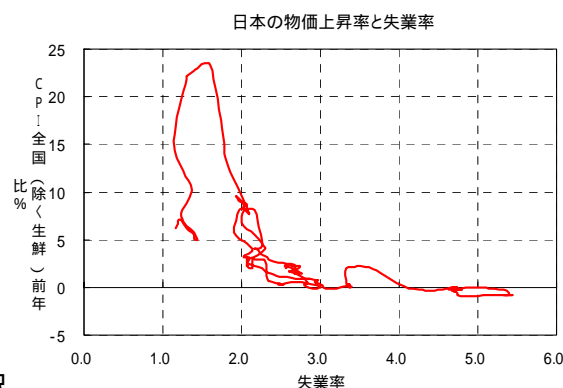
2. 完全失業率

- ・総務省統計局の「労働力調査」の一項目。
4万世帯の15歳以上の者 約10万人を調査
- ・完全失業者の定義：かなり厳しい条件
就業者でない(仕事をしないが休業者でない) & 仕事があればすぐつける & 仕事を探していた
- ・完全失業率 = 完全失業者 / 労働力人口 × 100
- ・高度成長期1%台 バブル期まで2%台(一時低下) 約10年間じりじりと増加して現在5%近辺
景気の動きに遅れて反応・・・遅行指標とされる
- ・失業者の属性に関する幅広い情報がとれる
男女別、年齢別、都道府県別などの統計も。また、求職理由別(勤め先都合、自己都合等)から自発的失業か非自発的失業かの見当もつけられる。
- ・他の先進国と比べれば高くない?(特に欧州大陸比)



3. 失業率と他の経済指標との関係

- ・フィリップス曲線：失業率と賃金上昇率(あるいは物価上昇率)とのトレード・オフ・・・経験的に観察される関係
貨幣錯覚がなければどうなるか?
- ・自然失業率仮説：貨幣錯覚によって乖離が生じるとの解釈
「ジョブ・サーチ理論」と「摩擦的失業」 ケインズ経済学が想定する「非自発的失業」のある世界

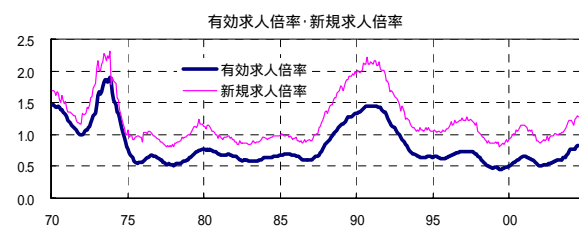


4. 有効求人倍率・新規求人倍率

- ・厚生労働省の「職業安定業務統計」の一項目
有効求人倍率、新規求人倍率とも季節調整値でみるとよい：「求人数 / 求職数」の倍率を示す
産業別、パートタイムなどの求人数もとれる(「新規卒者を除きパートタイムを含む」の数字が重要)
- ・1を超えるかどうか大切な判断基準：求人数が十分あるかの指標
- ・雇用のミスマッチが大きい：年齢、職種、給料などの不一致
折角求人があっても条件面で折り合わないことも

5. その他の話題

- ・他の重要な雇用関連統計：毎月勤労統計調査、雇用動向調査、短観の雇用人員判断D.I.等
- ・失業率には地域間格差 労働者の移動は自由な筈
沖縄や近畿で高い 北陸、山陰、東海は低い
- ・自然失業率はシフトしている? 雇用慣行の変化(終身雇用制)などから上昇している可能性も
- ・構造改革と雇用の拡大 新しい需要を本当に創出できるかにかかる・・・知恵の出どころ



以上